関西自然保護機構会誌 *27*（*1*）：*59－65*，　*2005*

どんな山，公園にしたらよいのか－大原野森林公園－

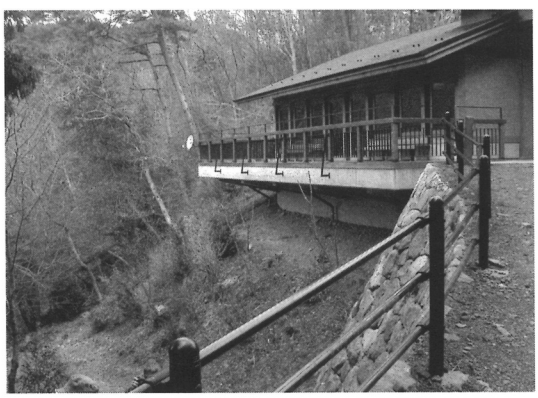
大原野森林公園　森の案内人　増　戸　秀　毅
大原野森林公園　森の案内人　丹　下　研　也
大原野森林公園　森の案内人　藤　井　　肇
ポンポン山懇話会　事務局長　大　槻　裕　治

What nature conservation and management should we aim at in Ooharano Forest Park, Kyoto?　Hideki Masudo, Kenya Tange, Hajime Fujii（*"Mori no Annainin" as the interpreter of Ooharano Forest Park*）and Yuji Otsuki（*Conservation Group of Mt. Ponpon-yama, Kyoto*）

大原野森林公園の「森の案内人」の誕生のいきさつ

大原野森林公園とは

大原野森林公園は京都市の西南端にあるポンポン山の北側斜面に位置し，標高400～600ｍの低い山や谷からなっている。コナラ林などの落葉広葉樹林が広がっていて，昔から薪炭林として人々に利用されてきた里山である。ヤブツバキなどの暖温帯植物とイヌブナなどの冷温帯植物が混生し，600種近くの豊富な植物相を構成している。動物はシカなどの哺乳類をはじめ，カワガラスなどの鳥類も70種近く見つかっている。京都市は当初ゴルフ場計画があったこの地域の134haを買い上げて，1998年にこの豊かな自然を生かした都市公園とすることにした。現在，この地域の特性を生かして「森の案内所」を中心に最小限の遊歩道が設置されており，小規模な伐採を行いながら里山としての管理が行われている。



里山林に囲まれて建つ大原野森林公園の「森の案内所」（2005年３月19日　編集事務局撮影）.

第一ステージ：ゴルフ場建設計画反対運動期

1990年１月ポンポン山ゴルフ場建設計画がマスコミにより明らかにされた。同年５月，大阪で反対する会が，翌年６月，京都で反対する会がそれぞれ結成された。1992年３月，ゴルフ場計画の凍結が決まり，７月に予定地を京都市が購入した。この間，自然保護団体は「調査なくして発言なし」の精神で1994年，山崎俊彦氏により「ポンポン山植物目録」が発刊され，西山の自然のすばらしさ，貴重さが広く知られるところとなり，貴重種などの保護活動を行ってきた。

第二ステージ：森林公園化に向けた活動期

1998年４月「大原野森林公園整備計画に関わる調査報告書」が作成され，最小限の開発で，「自然そのものが公園施設」，「自然ともに，市民とともに」いう新しい理念の都市公園ができた。1999年８月大原野森林公園検討会（村上興正会長）に，自然保護団体から委員等を出し，公園作りの提案をした。

2000年４月に公園がオープンする運びとなり，2001年８月に第１回大原野森林公園運営委員会（以下委員会）で，自然保護団体からからも意見を述べ，市民，学者そして行政が手を携えて公園作りに取り組んできた。公園運営もユニークで，運営委員会にはゴルフ場反対運動をした自然保護団体からも委員がでた。

この間，1999年に「ポンポン山植物目録」をさらに充実させた「京都西山周辺の植物目録（乙訓の自然を守る会），また2002年に「京都西山の自然（京都西山の自然編纂委員会）」を発刊し，さらに西山には貴重種が多く，自然が豊かさであることを広く知らせた。しかし委員会では公園が開園して４年経過したにもかかわらず，森の案内所が里山的管理，自然博物館として充分に機能していないことや基本計画にうたっているボランティア活動やリーダーの養成（森の案内人の養成）が実行なされていないことなどが問題として指摘された。また一方では，「瞳のような繊細な自然だから」を合言葉に，自然保護活動をしてきたにもかかわらず，とりわけ人気の花の時期になるとたくさんの人が訪れることにより，オーバーユース，貴重種の盗掘，谷筋に多人数でストックを使用して入るなどの踏みつけ，トイレ紙などのゴミのポイ捨て，喫煙，自転車や犬を連れての入山，釣りなどが問題になっている。その対策として，委員会で2003年９月に貴重種を保護するための，保護区域に立ち入るには事前に届出書と事後の報告書の提出すること，あわせてタバコの禁止など，公園利用のルールが決定しました。このような啓発の具体的な解決策として「森の案内人」の誕生が強く望まれてきました。

そのような背景から，2003年２月に「京（みやこ）アジェンダ21フォーラムエコミュージアム・ワーキンググループ」から自然保護団体へ参加要請があり，自然保護団体から４名，地元１名の計５名が推薦を受けて2004年２月に懸案の「森の案内人」が誕生する運びとなった。

第三ステージ：「森の案内人」誕生から賢明な公園利用を探る

大原野公園は京都市の都市公園であり，また特定の季節や花だけに来園者が集中するのではなく，一般市民の方に広く，多様に楽しんでいただかなければならない。そのためには来園者にマナーを守っていただき，この貴重な自然を満喫していただけるよう，私たちも調査を通じて知識を増やし，地元の昔の生活なども含めてよりきめの細かな案内が出来るよう，また案内所の展示物の充実に努めていかなければと考えている。

公園の森の案内人は，京都市から業務委託を受けている大原野森林公園運営管理協会に属している。公園の生態系を理解するとともに，インタープリンター（案内人・通訳）としての技術を身につけ，来訪者に公園内の多様な自然を伝えることの出来る「森の案内人」を目指している。そのためには行政，地元，学者，来園者，ボランティアなどと密なる連絡と協議を行い，より良い公園作りに取り組んでいきたいと考えている。これからも皆様のご協力をどうかよろしくお願いします。

（増戸秀毅）

森の案内人の現状と課題

さて大原野森林公園の森の案内人は，平成16年度からスタートした制度であり，京都市から業務委託を受けている大原野森林公園運営管理協会に属している。現在は京都市アジェンダ21フォーラム大原野森林公園ワーキンググループより推薦を受けたボランティア団体からの４名と地元住民１名の計５名よりなり，２名ずつのローテーションを組んで森の案内所の開所日に合わせ，土・日・祝日と水曜日のうち週２日，来園者への園内の案内を業務としている。業務委託仕様書による森の案内人の役割としては，「コース及び動植物・季節の見所等の案内，危険個所の表示，マナー等の指導」とあり，当初京都市は森の案内所に詰めることを想定していたようである。しかしポンポン山への入山者は約８割が大阪方面からで，京都方面からの入山者も善峰寺から杉谷地区を通るのが一般ルートであるため，案内所を通る人は少ない。そこで現在は保護区内に訪れた来園者に案内を行っている。

この公園の特徴として，公園中央部の竈ガ谷には希少な植物が多いことから，一昨年９月に保護区が設定された。保護区に入るためには京都市への事前届出が必要となり，オーバーユースの防止と保護区内への立ち入り人数把握を行っている。森の案内人の業務はその立入届出書の確認を行い，未届者に対してはその場で届出書の記入を求めている。届出制に関しては京都市が広報等に告知を行わない（告知が逆に呼び水となり更なるオーバーユースを招く恐れがある）ため，当初は届出が必要であることを知っている人は少なく，特に案内所を通らない大阪方面からの来園者で周知している人はきわめてわずかといった状況だった。保護区が設立された理由や届出制の必要性，約40年前まで薪炭林として利用されてきたことにより，冬期に明るい落葉広葉樹林が維持されてきた，またそのことによって多様で貴重な動植物が守られてきたことなどの説明を行っている。また保護区内でのマナーの啓発も行っている。さらには希少植物衰退の原因を探り，より良い生育環境にするための植生調査を行ったり，その植物の開花時期にはボランティア団体の協力を得て，コースロープの設置や監視を行っている。その他には動植物の発生時期や分布，炭窯跡の調査などを行っており，現在はアジェンダ21ワーキンググループと協力して公園のガイドマップや案内所の展示物，さらにはホームページ作りを行っている。

つぎに施行から１年を過ぎたので，今後への課題をあげてみたい。

(1)　保護区届出制

記入を求めるとほとんどの方が趣旨を理解して記入していただけるが，中には記入していただけない人がある（特に古くから度々入山されている人に限って）。最近では届出制がかなり浸透してきたように思うが，まだまだ「事前届出」が徹底されていない。公園内で案内人に会えば届出書を書けばよいと考えている人が多いようである。粘



「森の案内人」とともにコナラやアベマキなどが生育する落葉広葉樹林を観察するKONC主催観察会の参加者（2005年３月19日　増戸撮影）.

り強くお願いしていくしかないと思っている。

(2) 特定希少植物の開花時期来園者

保護区内には京都府で2ヶ所しかないといわれるフクジュソウの自生地があり，来園者は開花時期の2月半ばから3月末にかけての1ヵ月半で，年間保護区内立ち入り者の約6割にも達する。今年はこの期間で2000人を超えた。たくさんの来園者によりオーバーユースにならないようコースロープの設置や，盗掘防止の監視を行っている。来園者は昨年より2割以上増えており，今後も同様に増加していくものと思われる。その対応が急務となっている。

(3) マナーについて

園路外への立ち入りによる植物の踏みつけ，盗掘や花の摘み取り，ゴミのポイ捨て，トイレ紙の放置，喫煙，犬を連れての入山，釣り，ストックの使用，多人数での入山などの問題行為に対して，巡回のときに口頭またはビラ等でお願いしている。できれば現在よりもっと大きく見やすい看板の設置などを行い，啓蒙に努めていきたいと思っている。

(4) 動物の増加による植物の食害

近年，希少種を含めて植物への動物による食害が目立つようになった。シカやイノシシが増加しているものと考えられているが，まだその実態はよく分かっていない。まずは調査により実態を把握する必要がある。

(5) 案内人の体制と業務について

現在，案内人は1週間のうち2日しか入っていないが，近年は土日だけでなく平日に訪れる人も多くなっている。できれば案内所の充実や調査研究も含めて，常駐する学芸員を置くべきだと考えている。また現在はガイドのような本格的な案内業務や観察会などは行っていないが，年間を通しての様子が分かってきたことから，順次観察会の企画なども行っていきたいと考えている。

以上，森の案内人誕生のいきさつと現在の課題に関して述べてきたが，大原野森林公園は京都市の都市公園であり，一般市民の方におおいに利用していただかなければならない。そのためにはオーバーユースに対する対策をする一方で，来園者にはマナーを守ってこの貴重な自然を満喫していただきたい。私たちも地元の昔からの暮らしぶりなども含めて知識を増やし，京都市や協会主導のもとボランティアの方々ともより密なる連絡を取り合い，より良い公園作りに取り組んでいきたいと考えている。

（丹下研也）

大原野森林公園は今

森の案内人制度が発足して早や1年，5人の案内人が交替しながら2人1組で週2回のペースで山に入っているが，入るたびに何か新しい感動に出会うことができる。春はフクジュソウから始まり，スプリングエフェメラルと言われる小さな草花や樹々の芽吹き，夏の木陰に咲く幻想的なオオキツネノカミソリの大群落，また秋の花が終ると落葉樹の紅葉で全山色づく。またコマドリ，オオルリ，サンコウチョウ，トラツグミ，ホトトギスなど鳥のさえずりもにぎやかで，時折リスやシカの親子連れにも出会うことも有り，蝶やトンボなど昆虫も豊富だ。

私達はすべてに精通している訳ではないので，初めて見る生物があると「大発見？」とばかり，子供のように興奮しデジカメで撮りまくっては後でなんでもなく，ただ我々が知らなかっただけ，という事で決着。そうして一つずつ賢くなる。つい先頃も同僚の増戸氏と東尾根ルートを歩いているとモグラの一種ヒミズの死体があったので腰を下ろし観察していると何やら蠢くものが…。よく見ると丁度サソリかザリガニを1㎝ほどに縮めた

ような虫が死体の上を歩き回っているではないか。「これは一体なんだ!!」と，得体の知れない虫をフイルムケースに入れて持ち帰り，生き物に詳しい同僚の丹下氏に調べてもらうと，カニムシの一種らしいという事がわかった。別に珍しいものでなく，ただ人目につきにくい虫という事で一件落着。また一つ賢くなった。こうして昨年は園内初見の生物として，植物ではユリ科の希少種，動物ではテングコウモリ，蝶ではクロセセリ等が見つかっており，新しい発見のうちいくつかは公園初記載につながる。

今年も何が見つかるのか楽しみだが，楽しい事ばかりではない。園内の谷筋は希少種が多いため，事前に届出制となっているので入山者には届出書の有無を確かめているが，中には主旨を理解してもらえずに現地での申請を拒否される方とか，入山規定に違反する方（犬，マウンティンバイク，釣り，植物採集）等，一筋縄でいかない人もいて困る事は多々ある。しかし山に入られる方は自然を愛する人達ばかりと信じ，根気よく対話して説得するしか方法はないと思っている。また，今年は今までにない出来事も山で起きている。それはこれまでリョウブやネムノキがシカの食害で樹皮を食べられ，その痕が腐敗して倒れる被害はあった。しかし過去に食害にあったことがないカヤの木の根が今年に限っては軒並み食害を被っており，カヤの群落は目を覆いたくなる様な現状で，根元を思い切り掘り返され，倒れてしまう木が続出している。山に餌は乏しく動物達は余程食べるものに困っているとみえる。原因は多分，昨年いくつか来た台風，とりわけ23号の被害は大きく，クヌギ林は強風のため枝葉が引きちぎれ，秋に実るドングリどころか，翌年実る予定のドングリまで落としてしまった。（クヌギのドングリは２年目に実る）。当分食糧難は続くであろうし，今後もどのような被害が発生するのか予断を許さない状態だ。

このような様々な問題を抱えながら今日もウグイスのさえずりの中，案内所を後に山に向かう。

（藤井　肇）

どんな山，公園にするのがいいのか

大原野森林公園は京都市の公園・施設であり，動植物の保全対策，調査研究，教育プログラムなどの企画運営は，行政及び管理協会が主催している。アジェンダ21エコミュージアム大原野森林公園ワーキンググループが行政・協会から委託を受けて，ボランティアメニューの作成などに関与することがある場合でも，主体は行政・協会であり，協会・行政と既存のボランティアとのパイプ役を担う協力者として，アジェンダ21が位置する。

ポンポン山懇話会に所属するボランティア団体もあくまで協力者であり，主体者になることはない。ただ，盗掘，踏み付け，伐採，持ち込み（勝手にベンチなど設置）などの問題点を報告し，行政に問題を提起している。対策についての提案をして，早急な対応を求める中で，一定の役割をしているに過ぎない。公園外の民有地について，地権者の了解も得て，頂上付近の問題，貴重種の保護や分布状況について活動の範囲を広げている。

保全対策を構築するためには，頂上から東西の園路を結ぶ範囲の山林を購入し，学術研究の成果に基づいた里山管理やエコミュージアム作りなどが大切になってきている。1963年の頃の山をめざして，①見渡す限りフクジュソウが咲いている東斜面を再現する，②ポンポン山はフクジュソウの時期だけ保護区の立ち入りを届出制で認める，③その他の時期は自然観察指導員の指導下のもと保護区に立ち入る事が出来るようにしたいと考えている。

貴重種分布地域についての対応

現在，野間先生に指導を受けながら，試験的に枝切などの作業を行って分布の変化を調査している。系統的な数量調査（個体群生態学的調査）も行いたいと考えている。早急に取り組まないと，貴重種が消えていくスピードに追いつかない。コフウロ，ユキザサなど38種類は消えてしまったか，数個体から100個体しか残っていない。原因は盗掘，伐採，ツバキ・アセビなどの常緑の林が形成されて林床が暗くなったため開花しないこと，土壌の富栄養化などが考えられる。また今後，クヌギ，アベマキ，コナラなどが更新しない場合にはその影響で草本種は消えていく可能性もある。鹿によって，ツリフネソウの個体数は激減している。学者，行政，協会，ボランティアで組織を立ち上げ，早急な対策をすることが必要である。手をこまねいている暇はない。

自転車の乗り入れ禁止の看板設置で対応できる事もあるが，問題が起これば緊急避難的な対策が出来る体制が必要になる。作業を伴う調査は研究者の指導を得て，森の案内人と巡視の方の人員を増やし，ボランティアと協力して，調査・モニタリングなどの情報収集などを行いたいと考えている。つぎのような地域と群落について，今後の方向性を議論する必要がある。

(1) 森の案内所付近：学習の場として活用

ケヤキ・ウラジロウツギ群落→炭焼き時代の1963年に戻す。

アカマツ・コバノミツバツツジ群落→マツタケ復活ゾーンにする。

スギ植林→間伐。炭焼きの消し炭を利用して焼畑を再現。

ネザサ・ススキ群落→定期的に刈りとって変化を見ていく。

(2) アカマツ広場

東斜面についてアカマツを主要林としてマツタケを復活させる施業を行う。その他のところについては現状のままで変化を観察する。

(3) スギ，ヒノキ植林

地域ごとの照度調査を行い，70%から80%を維持する。間伐を行い変化について，モニタリング調査を行う。

(4) アセビ林

地域を決めて，皆伐，間伐，切らないところなど20m×20mコドラートを設定して調査を行う。

(5) ツバキ林

ケヤキの森の北と東の群落1ヘクタールは残す。試験的に皆伐区（20m×20m），間伐区（20m×100m）を設定し，モニタリングを行う。その他の地域についても皆伐と間伐を適宜配し，地域差を設けて調査を行う。貴重種などの分布拡大が確認されたときには，あらためて間伐・皆伐を行う。

(6) オオバアサガラ・チドリノキ群落

調査を繰り返し，5年をめどに手法を確定して更新を行う。

(7) オニグルミ群落

調査を行い更新する方向を探る。

(8) ケヤキ・ウラジロウツギ群落

斜面が厳しいところに立っている木については自重のために倒木する個体が出始めているので早急に調査を行い更新・間伐の方向を探る。地域は「ケヤキの森」，沢沿いの斜面。

(9) アカメガシワ，タラノキ群落

尾根筋のネザサの群落，水田雑草群落，崩落地マタタビ，クズ群落についても調査をした後，1963年に戻す方向を探る。

鳥類保護のために

2004年から3年間の調査を通して営巣，通過の鳥のリストアップの全容を明らかにしたいと考えている。鳥にとって，餌があり姿を隠せる森が保全されることが求められる。渡り地域の保全が前提になるが，1963年に戻す方向で現在の種類の営巣，通過地域などの保全を強化し，現在の鳥相維持につとめたい。

（大槻裕治）